

資 料

ヴィヘルン『ドイツ国民への覚書』 (続・1)

北 村 次 一

まえがき

東ドイツ社会主義体制の終焉に際して、改めて「社会主義」的思想・運動・国家組織の経済史的分析の課題が再生し、1848年、マルクス＝エンゲルス「共産党宣言」に対するヴィヘルンの「プロテスタント・マニフェスト」、つまり『ドイツ国民への覚書』（1849）の歴史性と現代性がいま新たに浮上した（拙稿「『経済史と現代』私考」、『福山大学経済学論集』16巻2号、1991、p. 29）。

『ドイツ国民への覚書』は、まさに統一ドイツの国民への覚書である。1849年に公刊されたヴィヘルンのこの著作は、その1世紀半後、改めてドイツ国民へ遺されたメッセージとなった。

「無数のヨーロッパ市民が、政治的基本権を獲得する斗いにその生活を結集した1848年、ドイツの2つの教会で、まさに対照的な2つの集会が舉行された。フランクフルトのパウルスキルへではドイツ最初の国民会議が、ヴィッテンベルクの伝統豊かなシュロスキルへでは、第1回のプロテスタント会議が。前者はまさに政治的団結のために、後者は、とくに教会的一致のために。根底において両者とも挫折するのであるが、しかし、両者とも、継起する後の世代への標識を立てることになった。国家と教会に。／大衆運動にはそれを指導する理論的根拠が必要である。1848年の両運動においても、その前提として、またその経過において、大衆をとらえる著作が登場した。歴史性ととともに現代性を供えた書である。3月革命の前には

マルクス＝エンゲルスの『共産党宣言』〔Manifest der Kommunistischen Partei〕が、教会会議の後にはヴィヘルンの『ドイツ国民への覚書』〔Denkschrift an die deutsche Nation〕が。Manifest 対 Denkschrift！宗教改革者ルーテルの『ドイツ国民のキリスト者貴族へ』〔An den christlichen Adel deutscher Nation〕を意識した「新宗教改革」の提言であり、マルクス＝エンゲルスに対抗するプロテスタント・マニフェストである。」（拙稿「ヴィヘルン『ドイツ国民への覚書』研究、『関西学院大学経済学論究』43巻3号、1989、p.511f.）

筆者はかねて、ヴィヘルン『覚書』に関する研究とともに、その翻訳紹介を志向して今日に及んでいる。その成果は『関西学院大学経済学論究』（42巻4号－43巻4号、1989－90）における資料、「ヴィヘルン『ドイツ国民への覚書』（1）－（4）」に公表されているが、改めて、『覚書』の構成の目次による一覧表示に併せその作業経過をたどると以下の通りである。

第1編

インネレ・ミッション一般 (1), (2)

第2編

インネレ・ミッションの領域

I 内部的境界線 (3)

1 国家的領域

2 教會的領域 (4)

3 一般＝道德的領域

4 社会的領域

II 地理的境界線

1 祖国におけるインネレ・ミッション

2 ヨーロッパ・ディアスポラにおけるインネレ・ミッション

3 大西洋彼岸におけるインネレ・ミッション

第3編

インネレ・ミッションの組織に関して

組織一般に関して

中央委員会

付録

中央委員会委員

同定款

エージェント、自由コルレスポネント

既加入団体

いま翻訳の作業成果を前掲4篇の直接的な継続として、本稿“(続・1)”および以後に予定する諸篇で順次示したい。底本は Wichern, *Sämtliche Werke*, Bd. I, S.175–366 所収の Nr.22, *Die innere Mission der deutschen evangelischen Kirche. /Eine Denkschrift an die deutsche Nation* (1849), S.215ff. で、「2. 教會的領域」（「直接の教會的領域でのインネレ・ミッション」）の続きである。前例にしたがって校訂者 Peter Meinhold による補注を加えている。

『ドイツ国民への覚書』（続・1）

教会的危機の最も憂慮すべき徴候のひとつは家庭礼拝が姿を消したことである*。いちど都市または農村の諸地域で、教会に属する世帯をまわって、そこでこのキリスト者の慣行が父祖の時代以来まもられ、また当代でも再び更新されている家庭礼拝を調査して確め、家庭礼拝が行われている世帯数とそうでない世帯数を比較してみよ。そうすれば、どの程度に、家庭のキリスト教的生活秩序のこの中心点が消えてしまっているか、直ちに分るであろう。同時に、人心に生き生きとした義務感をもたらすために解決・廃止すべき多くの抗弁や弁解をも知るにいたるであろう。その他の、より高次の、一般的なすべての動機（ここではその説明をしないが）は別として、ここで力説すべきことは、そのことが、神言を聞いたことのない数千、数百の人々には最も身近かな機会であるということ、その身分仲間においては、これとは反対に、確かに、いやきわめてより確かに、救いの告知をもたらすことはないであろうということである。われわれが言っているのは、家の使用人、農家下男下女ゲジンデに属する人々、手工業者のところ職人に属する人々のすべてである。この点に対する保護救済はゲマインデのなかの聖職者にまかすべきであるということは、われわれに納得しがたい。実際にそのような義務があったこれまでの時でもまたそういう事態であった。——そして結果は御覧の通りである。聖職者がこの救済扶助を引き受けて、その実現ができるかぎりでは、それはインネレ・ミッシオンの係わる問題ではない。だが、聖職者がこの期待を果さず、あるいは聖職者が適格な仕方で少くともひとりではこれを果すことができないかぎりでは、この関連においてその問題は、インネレ・ミッシオンのかかわるべき事態である。それぞれいい事態の場合は、まず一般に認められている人間的な仕方によれば、何よりも個人が内的な召命にもとづいて発言の主導権を握り、刺激を与え、それを話題にし、実行に移し、その価値を正しく分るようにし、その必然性についての確信を根拠づけ、困難の克服に力を貸し、ためらいをなくするのである。——そしてこの召命を、いまやこの点でインネレ・ミッシオンがもっている。それは、従来、聖書普及協会が生れるのとは全く別の意味において、つまり教会共同体のメンバー自身がひとつの聖書普及協会となるという風に作用し、実際につくられねばならない。それは、聖書のために、すなわち同時に、自分たちに告知された主なる神のために、

日毎に集まる大きな団体、むしろクリスチャン・ホームである。主なる神こそ、この団体が生れると、最も重要な個所のひとつ、つまり家庭の中心点から、教会の危急を切抜けるため、またそれによって教区生活を高揚させるために、もう一度、人の心への新しい入口を見出される御方である。

* H¹へのヴィヘルンの追記：Hausandacht pg.57 [=次頁]⁷⁴⁾添付を見よ。ヴェルダール聖書普及協会は1849年もしくは50年にその聖書通読日課表35000部を印刷した。これらはすべて家庭で家庭礼拝に用いられた。

それとも例えばイギリスにおいて、周知のように、大抵のまともな家庭でおめにかかるような、そんな行儀作法がわれわれのところに再び訪れることは不可能なことであろうか。自らがその家では神の司牧者であり、かかるものとして、はじめに自らの近隣の地域でインネレ・ミッションのために配慮せねばならぬということを、家父たちが再び自覚的に意識することはかように不可能であろうか。わが祖国のゲマインデにおいてすでに再び生じたこの行儀作法の新しい始まりは、われわれにとって望まれている進歩に対する保証である。だが進歩は忍びやかではなく、雄々しい前進をもって道をきりひらいた。というのは一步一步、われわれに論議の余地のある時代が近づいていることをやがて経験するからである。インネレ・ミッションはこの方途でも誤ったためらいや羞恥があってはならない。それは神的な生活基盤の上への家庭の再生にかかわることである。^{*}

* H¹へのヴィヘルンの追記：家庭礼拝を如何に整えるべきか？ 聖書、讚美歌、教理問答書。

だがこの試みがみごとに実を結ぶや、そこからひとりで、偽りでなく全く自然的な一連の欲求が発生し、それが姿を消すと新しい欠如を示し、それが現われるとキリスト教的・教会的生活に新しい進歩が開けることとなった。つまり、聖書をそのように用いることによって、不可避免的に、それを一層よく理解したいという要求、年次交替で読みうる整理・区分への要求が生じる。この要求がひとりで生じないようなと

ころではめざめさせ、満たさせられねばならぬであろう。後者についてもまたすでに処置が行なわれている。周知のように、後者の点についてはすでに古いプロテスタント教義学者が準備してきた。比較的近い時期に作られた、例えば、シュトラウベ牧師が指導するヴェルター聖書普及協会(Jüterbog傍)の聖書通読日課表、デュッセルタールで刊行された定期誌の通読日課表、とくにMeursのツァーン神学校長によって、また最後にブンゼン博士によって(彼の最近の祈禱書で)公刊されたが、それぞれ独特の長所をもち、偶然にもここかしこで受け入れられ、すでに少なからぬ範囲の聖書日課通読者や家庭で、神言において一体となり、日々の交わりのために集った。

* H¹へのヴィヘルンの追記：⁷⁵⁾貼付を見よ。1849年に35000部が印刷された。

だが、そのあとで、種々の段階の国民の一般的・キリスト教的教養のため聖書の広大な神的経綸でのオリエンテーションのためより直接的な指導が必要となる。つまり口頭での積義である*。この実践を見て廻ったものは、この実践——その中心点、つまり神言において十分にひとつである——の多様性の正しさと同様、このことを否定しようとは思わぬであろう。パイブルクラスはこの要求に応じるであろう。われわれはそれを長い間、インネレ・ミッシオンの領域にふさわしいものとみている。それはもちろん独自に形成されたのであるが、ヴェルテンベルクで類似の仕方のゆたかに祝福された集会として大衆に好まれるようになるまでにもなっており、あるいはまた、それは教会統制的に、したがってゲマインデにおいてしっかりと秩序づけられ、ただ偶然的にこれを助長する牧師の気持しだいでその存続がきまるものでもないというまでになっている。それ故に、インネレ・ミッシオン団体は、家庭礼拝のためと同じように、その広範な基礎固めと実施のために、今後、きっかけを与えるべきだということを、われわれもまた信じている。とくに、神学候補者はこの部分でゲマインデにおいて奉仕すべきであり、同様に、ここで教会的・キリスト教的な考え方をもちた学校教師は、ゲマインデのインネレ・ミッシオンのディアコンとして最も本質的な奉仕をすべきである。これに対して生じた困難はすべて、それを遂行するに際して正しい観点を主張することにより、一般に信じられているよりもおそらくは容易に除かれるであろう。そのことに特に重要なのは、この聖書解説が教会堂のなかで行われるので

なく、出来る限り会員制のメンバーで、通常、一定期間内だけ（例えば半年間）、本来の礼拝の形式でなく行われるということである。その際、出席者のひとりひとりが自分の書物を手にして読み返すような、まさしく本来的に聖書の積義でなければならぬ。積義は純粋な積義としてそれぞれの説教形式から外形的に区別されねばならぬ^{**}。そのことによって、同時にまた、説教者と聴衆における真に聖書主義にもとづく説教の要求、教会メンバーの願望が共同の礼拝の中に反応をもたらすことになるであろう。説教が聖書通読の生活ペース（聖書日課）と結びついていることを見せるとき、とくにそうである。——この点で、シュレスヴィークのニールゼン総監督のような人物は、さきにザラウ・ラントゲマインデで活動し、家庭・学校・個人礼拝・日曜祝祭を相互に結び合すことに通じていたが、さらに広い範囲で周知させようとしたのであって、この様な場合、たしかに極めて豊かな祝福に満ちたものに違いない。⁷⁶⁾

* H¹へのヴィヘルンの追記：Lisco, Gerlach および Hirschberg 版聖書の積義⁷⁷⁾, pp.

** フランスでは牧師たちの指導のもとに聖書の解説箇所が参加者によって話し合われた。少なくともリヨンで Croix Rousse 前市の場合がこれである。

聖書およびその中に含まれる救済の真理を根底的に理解したいという要求、それは——少なくとも一般的には——ただ口頭で語られる説教によってだけでは満足されぬものであるが、またとくに福音の見地のもとで知識の領域を展望しようという要求は、最近、豊富な文献の部門を招来した。W. Besser, Bahnmaier, Hassel, Mühlmann, Naumann, Perthes, Raw, Felix Schneider, Steinkopf, Velhagen und Klasing, K. Winter, Wohlgemuth, H. Zimmer その他の出版者、またこれらと結びついた文筆家たちがこの点で影響を与えたことは、ここではまたおおまかにしか言うことが出来ないが、ともにまたインネレ・ミッシオンの活動の中に数えられる。ここではさしあたって次のようなことが考えられている。つまり、この目的のために種々の見地から、だがすべてインネレ・ミッシオンの精神と方法とにおいて福音的書籍の流布のための団体によって企てられるということである。シュトゥットガルトの福音書籍本部、部分的にハンブルク傍ラウエス・ハウス・アゲントゥール、またその後、最後にベル

リンの福音書籍協会が、定評ある古代教父の力強く教化的な著作、従って新しく復刻した教会的民衆本を廉価で出版することを、とりわけ、その使命とした。ルーテル、リーガー、ハインリヒ・ミュラー、ベンヤミン・シュモルクその他の最も定評ある著作がこのようにしてまた国民のあらゆる階級の何千という人々にひろがった。⁷⁸⁾ カイザースヴェルト社もまた、とりわけそのカレンダー^{*}で国民へ同様な奉仕を行った。⁷⁹⁾ その他のもののなかでとくに挙げるべきは2つの団体、ザクセン州に中心点をもつ北ドイツ協会と、かつてヴュルテンベルクでキリスト教にはじめて場所を開いたカルウ〔Calw〕⁸⁰⁾の出版協会である。北ドイツ協会はその起源を危機の苦難の時代に得ており、1813—1815年の戦争の年に最初の大発展を与えられた。その主たる働き人はウーレの死後、説教者ヴェスターマイヤーである。協会の後援者のなかでStolberg伯の名が上位にのっている。協会は47人の事務局員とともに、とくに北ドイツ全域で活動し、その存続中に異常な数のキリスト教著作を最廉価で流布させた。そのなかでとりわけ教会史が重要である。——カルウ出版協会は外国・内国伝導者バルト博士の指導のもと、とくに1832年以来大がかりな活動効果を得て、次第にその視野を絶えず拡大した結果、15年の間に80万部の書籍が販売された。そのなかには一般世界史、博物、物理のほか、教会史（すでに12カ国語に翻訳され）、聖書史（すでに11カ国語で）、聖書博物、同地理、考古学もあり、それに加えて、北ドイツ協会と同様、小学校のために歴史的関連において聖書の連続した解説を提供した。イギリス・トラクト協会、スコットランド・トラクト協会による支援がなければ、もちろんカルウ本部の極めて低廉で、同時に遠大な経営は可能でなかったであろう。⁸¹⁾

* H¹におけるヴィヘルンの追記：「Kalender. 其後にこの様な諸カレンダーが出版された。」

** H¹におけるヴィヘルンの追記：「1849年、グスタフ・ヤーンのフランス革命史（142ページ）も」⁸²⁾

だが、われわれはここでまた問わなければならない。一体、教会は、利用すべきであり、また利用できたはずのこれらすべての事業をそのようにしているであろうか。この点に関して、インネレ・ミッションの精神は、教会のこの問題の助成のために、

いま挽回すべきことをすべて果したであろうか。キリスト教的な家庭意識の覚醒によらずして、かような書籍への需要がどの程度に増加するだろうか。また現存するものが満足を与えない場合、より一層十分なものを生み出し、流通させる可能性は容易にされるだろうか。とりわけ、その場合、下層階級の人々に健全なキリスト教の読物を提供することに、そんなに屢々困難を感じることは少ないであろう。これまで長らく、祝福の経験を通して、より一層広い範囲に、この種のよい書物を流布させようと熱心に準備して、ますます多くの場所が求められねばならなかったことに較べてそうである。それによってまた教会のためにどんなにか多くのことが達成されることだろう！どんなにか多く悪が阻止されることだろう！どんなにか一層多くの人々が主に導きもどされることだろう！

今日の時代には、多くの場所でもはや聞かれることも読まれることもないということは、インネレ・ミッシオンにとって、教会的領域を念頭におく限り、しばしば十分には考慮されていないひとつの道しるべである。インネレ・ミッシオンは国民にそれこそ実にさまざまな方面から、ただひとつの中心点、つまり神言に立帰らせるものである教会的な読み物をつくり出さねばならないし、また国民にこの手段の利用を出来るかぎり容易にしなければならぬ。この目的の達成のためには、真に良い書籍の小図書館の設立より他にこの目的にかなうものはないだろう。それはさまざまな方法で利用され得るであろう。それぞれがおよそ100—300冊の書物を容れることができ、学校・工場・村落・個々の市区に設けられ、それぞれが他のものとは異った他の書籍を収め、相互に、さまざまな場所で時々交換されることになる。多くの場所で（例えば村落と大都市で）、読者に書籍をもっていき、彼らが再び取りにゆくようにすれば、この目的のために設立が非常に促進されるようになるだろう。——フランス人・イギリス人・アメリカ人はこの点でもその実行でわれわれに先行している。フランス福音教会はさまざまな場所にこの種の小図書館300に発送したし、大きなイギリス・トラクト協会は1847年の第48年次報告によれば、そのときまで、最も荒廃した地域にあるそのような図書館1589に、また日曜学校2268に、その他の学校、救貧院に、工場に、全部で4225の宗教的な小民衆図書館を設立してきたという。それらは、とにかく非常に僅かな、その上なお割引された協会の値段で11741ポンドの価値に見積もられた。これに加えて1年間で月刊誌727,470部、キリスト教年鑑138,032冊を出版した。⁸³⁾

われわれはここでトラクト協会を挙げた。その場合、ドイツでは多くの面から偏見をもってこの施設の名が挙げられるのを常とするが、広く流布しているこのいやな偏見は恐れるものではない。他の人々がこの大事業に対し抱いている好意と愛情は、いままで、けっしてその不利さと釣り合うものでない。われわれはここで、この偏見を除くため、あるいは少くとも弱めるためになにがしかのことはしたいと思う。これらの協会の根底にある理念は、きわめて純粹、きわめて深大に国民の欲求にもとづいており、その実現は、インネレ・ミッションの求めているところのものをも達成するためにきわめて必要不可欠なものである結果、それは最も根本的な顧慮、最も綿密・正当な評価を要求して然るべきものである。これまで行われてきたことすべての点で満足しているとは決して認め得ないのであり、とくにイギリスの協会が年々数百万も発送している宗教書の小冊子文献が、ドイツの地に移植されるやいなや、通例以上にドイツ人の性格に適應してほしい、そのようなものとして、われわれはこのことを言っているのである。トラクトのことが問題になるかぎり、われわれがドイツで通常考えるこの文献だけというのはあの大きなイギリス的組織が目的としているものの一部にしかすぎない。この組織が着眼していることは、同時に、あらゆる種類の書籍の出版である。このトラクト協会はこの点で最大のキリスト教大衆書の出版社であり、直接、その書籍とその大規模な全経営をもってインネレ・ミッションの市場に出ているのである。このことを証明するのはむつかしくない。

校訂者マインホルトによる補注

- 74) この添付はH¹の57頁にはり貼付けられた新聞切抜で、1850年3月30日付プロイセンのケーニヒスベルクで出た福音主義教会新聞のものと思われ、シュトラウベ〔Straube〕牧師のヴェルダー聖書普及協会の聖書通読日課表に関する記事が載せられている。
- 75) ヴェルダー聖書普及協会は、Jüterbog 傍ヴェルダーにおいて聖書通読団体として1834年2月15日に設立された。添付については前注で述べられている。— さらにヴィヘルンが使用したものは、ツァーン『教会暦による聖書物語』〔F.L. Zahn, Biblische Historien, nach dem Kirchenjahr geordnet, mit Lehren und Liederversen versehen, Elberfeld und Moers 1844. — ブンセン〔Chr. C. J. Bunsen〕による『一般福音讃美歌・祈禱書』〔Allgemeine evangelische Gesang- und Gebetbuch〕(『著作全集』IV, 2, Erl. zu Nr.16 Anm.33 および Erl. zu Nr.23, 「付録：ラウエス・ハウスの日課礼拝」〔Anhang: Der tägliche Gottesdienst im Rauhen Hause〕, Anm. 7-9参照)は401頁以下に『教会暦に準拠した聖書通読日課表』〔Lesetafel über die heilige Schrift nach der Ordnung des Kirchenjahres〕を収めている。それは1845年 Agentur des Rauhen Hauses で独自の著作として出版されたものである。
- 76) ニールゼン〔Nicolaus Johann Ernst Nielsen, 1806-1833〕は、1832-1840年、ホルシュタインのザラウで牧師であり、1840年、シュレスヴィークに行き、1848年、シュレスヴィーク動乱後、総監督になった。彼の国家的立場の故に、ほどなくデンマーク当局と衝突した。そこで彼は牧師・総監督としてEutinに行き、そこから1853年、宮廷説教者・教会顧問としてオルデンプルクに行った。彼はシュレスヴィークおよびホルシュタインにおいて典礼形式の刷新に功績があった。典礼的見地において彼の建設的な効果について、彼が編集した著作、『典礼研究・評論』〔“Liturgische Studien und Stimmen” über eine Kirchen-Agende von Schleswig-Holsteinischen Geistlichen, Erstes Heft, Schleswig 1842〕、続篇は出されてない。— 彼は関しては、最後にRGG³, IV, Sp. 1472(Lit.)
- 77) リスコ〔Friedrich Gustav Lisco〕, Die Bibel oder die ganze heilige Schrift,

1. Abtlg. Das Alte Testament, 2 Bde., Berlin 1843; 2. Abtlg. Das Neue Testament, 2 Bde., Berlin 1833 und 1834 u.ö.—ゲルラッハ〔O.v. Gerlach〕, Die heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach Dr. Martin Luthers Übersetzung mit Einleitungen und erklärenden Anmerkungen, 7 Bde., Berlin 1835 ff.—Biblia sacra nach der Übersetzung Luthers mit Anmerkungen von Ehrenfried, Liebig. Hrsg. von J.Fr. Burg, Hirschberg 1756—1765.

- 78) シュトゥットガルト福音書籍本部は1835年以来、リーガー〔E.H. Rieger〕の旧・新約への聖書考究ならびにその著作・説教を発行した。ラウエス・ハウス・アゲントゥールは1845年以来、ルーテルの信仰問答書を、一部分シュペクター〔Otto Speker〕のさし絵入りで、またミュルラー〔Heinrich Müller〕やシュモルク〔Benjamin Schmolck〕の説教・祈禱を公刊した。1844年、ラウエス・ハウスの出版社設立に関するヴィヘルンのメモについて『著作全集』Bd. IV, I, S. 296 および解説補注、ならびに Fl. Bl. 1847, Sp. 328ff., 352, でのさらに続行される刊行リストを参照。ベルリン福音書籍協会はルーテルの信仰問答書、ミュルラーの教化的な著作のほか、アルンツ『真のキリスト教に関する4書〕〔Joh. Arndts “Vier Bücher vom wahren Christentum”〕およびシュペナー〔Ph. J. Spener〕, フランケ〔A. H. Francke〕の敬虔主義的教化著作を発行した。それについて Evg. l. Kirchenzeitung, Bd. 38 (1846), Sp. 451ff. および再版 Fl. Bl. 1846, S. 110f. を参照。— この件について、また Fl. Bl. 1851, S. 294f. を参照。
- 79) 『キリスト教的国民カレンダー〕〔Christliche Volkskalender, ein freundlicher Erzähler und Rathgeber für die liebe Christenheit für das Gemeinjahr 1842. Mit täglichen Bibelsprüchen als Loosungen für das ganze Jahr und mit mehreren Abbildungen Kaiserswerth 1842〕. 翌年以降もこのカレンダーは同じタイトルで継続された。
- 80) 「北ドイツ・キリスト教協会〕〔Der christliche Verein im nördlichen Deutschland〕は、1811年ウーレ〔Uhle〕兄弟によってキリスト教教化書籍の流布のため設立された。Fl. Bl. 1862, S. 20ff. 参照。— さらにホフマン『北ドイツ協会百年史〕〔Bruno Hoffmann, Hundert Jahre des Christlichen Vereins im nörd-

lichen Deutschland, Eine Jubelschrift Hrsg. zum 25. Juni 1911(1911), S.9ff.] — ビーレ、後にマグデブルク傍エルバイの総監督ヴェスターマイヤー [Westermeier] がウーレ [Johann Gottlieb Uhle] の後、1833年以来、協会の会長であった。協会の後援者に Anton Graf zu Stolberg-Wernigerode (1785-1854) があった。

- 81) 1829年に設立されたカルツ出版協会に関しては、Fl.Bl. 1847, Sp.316ff. および Fl.Bl. 1849, S.63, S.362の報告を参照。
- 82) ヴィヘルンは、北ドイツ・キリスト教協会によって出版された次の書籍を引き合いに出している。Geschichte der christlichen Kirche, 7 Bde., Halle 1837ff. — Gustav Jahn, Geschichte der französischen Revolution, Eisleben und Halle, 1849.
- 83) The forty-eight Annual Report of the Religious Tract Society for circulating religions publications in the British Dominions and Foreign Countries, London 1847. — 103頁に民衆図書館に関する記事がある。その数は4245 (4225でない)、その価値は11744 (11741)ポンドとあげている。ヴィヘルンによるその他の記事は、同上書、S.111, S.113.